茨　城　大　学　学　報

第353号

令和2年10月～令和2年11月

INDEX

◆　キャリアセンターがライブ動画配信を開始
◆　学内での課外活動再開を前に感染症対策研修
◆　岡田誠教授ら「チバニアン」申請メンバーに学長学術特別表彰
◆　地球・地域環境共創機構（GLEC）が気候変動アクション環境大臣表彰を受賞
◆　水戸駅南サテライトのオリジナル収納棚、「いばらきデザインセレクション 2020」に選定
◆　日立キャンパスに大学院生考案の休憩所が完成
◆　「地域に活力を与える女性たち」テーマにセミナー開催
◆　オンライン授業の経験と知見から教育改革を展望するシンポ
◆　農学部・コマツ共同研究で生産した米を県内団体に寄贈
◆　研究開発職の働き方を学ぶ学生対象の企業訪問ツアー
◆　水戸市男女平等参画社会づくり功労賞を受賞

茨城大学広報室

TEL 029-228-8008

FAX 029-228-8019

◆　キャリアセンターがライブ動画配信を開始

本学のキャリアセンターが、10 月 5 日、就職活動に関する役立つ情報などを提供するライブ動画配信をスタートさせました。

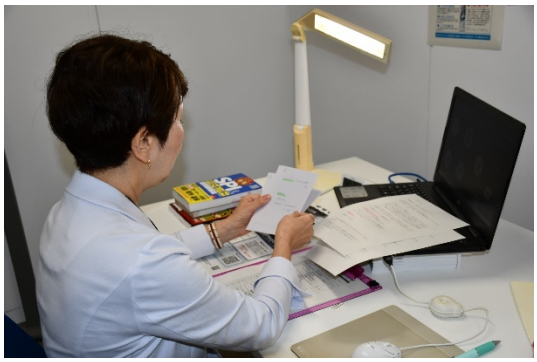
この取り組みは、キャリアセンターをスタジオに見立て、現在利用している遠隔授業の仕組みを応用して、毎週月曜日、お昼に 15 分間の番組をオンラインで配信するもの。キャリアカウンセラーや教員、職員がパーソナリティを務め、就職活動のアドバイスやキャリアセンターのイベント情報を紹介したり、学生から寄せられた質問に答えたりしています。

発案した同センターの菊池美也子カウンセラーは、その背景について、新型コロナウイルス感染症の影響でキャリアセンターへ足を運ぶ学生が減っていることと共に、「キャリアセンターがガイダンスなどたくさんのプログラムを提供している中で、『ひとまずここにいけば最低限の情報が集まる』という、わかりやすい定型配信の場を作りたいと思っていた」と語っています。

実現にあたってはキャリアセンターの職員が協力してアイデアを出し合い、背景画像となるボードのデザインや、楽器を使った演出、屋外でのモニタ上映などの施策により、学生たちの関心を喚起しています。職員のひとり、山口菜穂さんは、「卒業までに１回もキャリアセンターを利用したことがない学生もいます。つながるきっかけを作れれば」と話しています。

ライブ動画配信の様子

スタッフが協力して配信に取り組んでいる


学生からのおたよりを紹介

◆　学内での課外活動再開を前に感染症対策研修

10 月 19 日より大学内での学生の課外活動を段階的に再開するのを前に、学生団体へ向けた感染症対策に係る研修会を、同月 12 日から 15 日にかけて各キャンパスで開催しました。

本学では今年度前学期に感染症対策のための入構規制をして以降、キャンパス内での課外活動を禁止してきました。その後、9 月 29 日に始まった後学期では対面授業を拡充したことから、課外活動の再開についても学生から期待や要望の声が寄せられていました。

そこで大学側は、登録している部活やサークル等の学生団体に対し、感染症対策を担当するメンバーを選出することを求め、団体代表とともに研修会に出席し、そこで得られた知見を団体内で共有して必要な対策を講じることを再開の条件としました。

研修会ではまず、保健管理センターの布施泰子センター長が、医学的な見地からウイルスの特徴などを説明。布施センター長は、「みなさんの中には感染が落ち着いてきていると受け止めている人がいるかも知れないが、特効薬ができたわけでもワクチンが普及したわけでもなく、医学的にいうと本質的には好転していない」と語り、一層の注意を求めました。

次に、スポーツ社会学が専門で、バスケットボール部の顧問や全日本大学バスケットボール連盟の理事も務めている加藤敏弘人文社会科学部教授が講演。加藤教授は、自分たちの利益だけを考えるのではなく、個々が責任をもって対策やリスク判断をすることの重要性を強調しました。その上で、「感染者やその人が所属する団体を誹謗中傷したり、よからぬ噂を吹聴したりせず、サークル内で感染の疑いがある人が出たときにすぐに報告できるような雰囲気をつくることが大事」と訴え、具体的な対策方法を紹介しました。

参加した学生は、「専門的な知識も得られてよい機会になった。まずは自分がどう活動していたかをしっかりと覚えておいて、感染により注意していかなければならない」などと語っていました。

布施センター長による講演

加藤教授による講演

水戸キャンパスの講堂で研修を受ける学生たち

◆　岡田誠教授ら「チバニアン」申請メンバーに学長学術特別表彰

地質時代名「チバニアン」の誕生へ向けて、申請チームの代表として活動を率いた大学院理工学研究科（理学野）の岡田誠教授と、同チームで研究を進め、多大な貢献を果たした本学卒業生の菅沼悠介氏（国立極地研究所）、羽田裕貴氏（産業技術総合研究所）の計 3 人に、茨城大学学長学術特別表彰を授与しました。

岡田教授を代表とする申請チームは、千葉県市原市の地層「千葉セクション」を国際境界模式層断面とポイント（GSSP）に認定するための活動を行ってきました。今年（2020 年）1 月 17 日に行われた国際地質科学連合（IUGS）の理事会において同地層が GSSP として承認され、地質時代の中期更新世（約 77 万 4000 年前～約 12 万 9000 年前）が「チバニアン（Chibanian)」と名付けられました。

菅沼氏は 2000 年に茨城大学理学部を卒業。専門は地質学・古地磁気学で、地層や氷河などから地球環境の歴史的な変動を解明する研究をしており、多数の論文を執筆しています。あわせて、申請チームの事務局長として提案申請書の執筆等を中心的に進めました。

羽田氏は、岡田教授の研究室で千葉セクションに関わる研究に従事し、2019 年 3 月に博士号を取得。羽田氏を中心とした地層中の有孔虫化石の分析等の研究成果は、今回の GSSP 認定を決定づける重要なデータのひとつとなりました。

今回 3 人に授与された茨城大学学長学術特別表彰は、本学に在籍する教員あるいは卒業・修了した者のうち、「ノーベル賞、文化勲章、日本学士院賞、紫綬褒章、文部科学大臣表彰（科学技術特別賞）等を受賞するなど極めて顕著な研究成果のあった研究者」、あるいはそれに準ずる「極めて顕著な研究成果のあった研究グループの代表を務める研究者又はその研究遂行に極めて重要な役割を果たしたと認められる研究グループの研究者」に贈られるもので、今回が初めての授与となりました。

10 月 23 日、水戸キャンパス図書館本館 3 階ライブラリーホールにて表彰式を開催し、太田寛行学長が 3 人に表彰状と盾を手渡しました。太田学長は、「茨城大学での出会いから始まる研究仲間を大事にされて、顕著な研究成果に結びつけたことに対して、心より称賛の拍手を送る」と述べ、功績を称えました。

表彰式後には岡田教授が記念講演を行い、GSSP やチバニアンの概要についてわかりやすく解説したあと、今回の受賞者以外にも多くの学生たちが貢献したことを紹介しました。

左から羽田氏、岡田教授、太田学長、菅沼氏

岡田教授による記念講演

◆　地球・地域環境共創機構(GLEC)が気候変動アクション環境大臣表彰を受賞

本学の地球・地域環境共創機構（GLEC）が、令和 2 年度気候変動アクション環境大臣表彰を受賞しました。

環境省が実施している「気候変動アクション環境大臣表彰」は、気候変動の緩和、気候変動への適応に関して顕著な功績のあった個人または団体を称えるため、環境大臣が表彰を行うもので、これまでの「地球温暖化防止活動環境大臣表彰」が今年度よりリニューアルされました。表彰の対象となるのは、①開発・製品化部門、②先進導入・積極実践部門、③普及・促進部門の３部門で、茨城大学 GLEC は、「普及・促進部門」での表彰となりました。

茨城大学 GLEC は、今年 4 月、それまでの地球変動適応科学研究機関（ICAS）と広域水圏環境科学教育研究センター（CWES）を発展的に統合する形で新設されました。

2006 年に設立された ICAS は、「適応策」の研究・教育・社会実践というミッションを全国に先駆けて掲げ、国内外でフィールド調査や気候変動影響リスクの研究、人材育成の実績を重ねてきました。また、霞ケ浦（北浦）畔に拠点を有する CWES では、湖沼、河川、海岸、農業、水産業、観光、地質、歴史、防災といった地域資源を活用した実習・研究を長年実施し、文科省に指定された全国唯一の臨湖共同教育施設として、全国の学生たちの実習を受け入れてきました。

GLEC は、両組織の強みを最大限に生かし、地球環境および地域環境を対象として、フィールド科学から予測・政策科学を含む総合的な教育・研究を推進するとともに、環境問題の解決と持続的な環境の共創をめざす本学の戦略的な研究センターとして設立されました。今回の「気候変動アクション環境大臣表彰」の受賞は、両組織の長年の実績と GLEC としてのより発展的な取り組みへの期待が評価されたものであります。

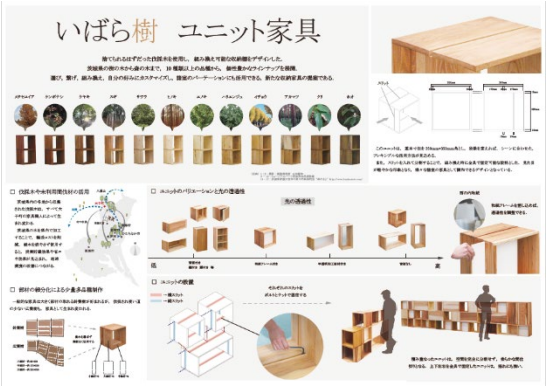
◆　水戸駅南サテライトのオリジナル収納棚、「いばらきデザインセレクション 2020」に選定

本学の施設「水戸駅南サテライト」で使用しているオリジナル製作の家具「いばら樹ユニット家具」が、このたび「いばらきデザインセレクション 2020」にて「選定」されました。

茨城大学水戸駅南サテライトは、JR 水戸駅に近い茨城県産業会館の 2 階にあり、教職員のテレワークや学外者との会合、ゼミ活動やイベントなどを実施できるスペースとして、2020 年 4 月に開設されました。

室内のテーブル類の材料として、茨城県内で伐採された 10 種類以上の品種の木材を使用しており、なかでもユニークなのが、今回「いばらきデザインセレクション」に選定された「いばら樹ユニット」という収納棚。工学部の一ノ瀬彩研究室の監修のもと、茨城県大子町の有限会社川井材木店と大森有限会社の協力により制作したもので、立方体あるいは直方体の木製ユニットを自由に組み合わせることで、任意の大きさの収納棚を組み立てることができます。並べることで木の品種ごとの個性的な色や手触りも感じられ、ユニットによっては蓋をつけたり、常陸大宮市名産の西ノ内紙（和紙）を取り付けたりすることで、見た目にも楽しく、かつ透光性や機能性も高くしています。この「いばら樹ユニット」により、用途に応じて空間のレイアウトを自由に変更できるフレキシブルなスペースが実現しました。

一ノ瀬助教は、「無機質になりがちなオフィス空間を木質化・家具のユニット化によって自由で居心地のよい環境になるよう学生たちとデザインした。今後も県内の森づくり NPO や大子町の材木屋さん達と一般向けのシリーズ家具の販売展開も進めており、空間の木質化と県産材利用促進に寄与していきたい」と語っています。



プレゼンボード

水戸駅南サテライト内に設置された
「いばら樹ユニット」収納棚

◆　日立キャンパスに大学院生考案の休憩所が完成

日立キャンパスに、地域住民との交流の場にもなる新しい休憩所が完成しました。大院生のアイデアがベースとなっており、11 月 5 日に完成披露会が開催されました。

休憩所の設置は、昨年の本学創立 70 周年を記念し、同窓会等からの寄附を受けて進められた正門環境整備の一環で、工学部・茨城交通株式会社・日立市公共交通会議の三者の連携のもと進められました。その設計にあたっては、工学部・大学院理工学研究科の学生を対象としたデザイン・コンペティションを実施し、学部 2 年生から大学院博士前期課程 1 年まで、8 組 10 人の学生が参加しました。審査の結果、大学院理工学研究科博士前期課程の中根央喜さんの提案「Connecting roof（コネクティング・ルーフ）」が最優秀賞に選ばれ、建築を進めていました。

人を中へと引き寄せるような複雑な形状の屋根が特徴で、中には茨城県産の木材で制作したベンチも置かれています。完成披露会で工学部の増澤徹学部長は、「硬い中にも柔和な感じのする良い休憩所ができた」と評価しました。この休憩所はすぐそばにバス停があり、バスの待合所として誰でも利用することができます。茨城交通株式会社執行役員・日立オフィス運輸部の仲野徳寿部長は、「バス運転手がお客様を容易に視認でき、雨の日も快適にバスを待てるという点で素晴らしいものになった」と述べました。

考案者の中根さんは、「大学の授業で構造などの詳細まで考えられる機会はなかなかなく、今回、いざ建築にするという中でいろんな壁にぶち当たったが、それを学生のうちに体験できたことが良かった。いろんな方々の協力で建築が立ち上がっていくプロセスは感動するもので、建築の社会性というものを感じた」と感慨深げに振り返り、「早く使用しているところが見たい」と期待していました。

完成した休憩所「Connecting roof」

考案者としてスピーチする中根さん

完成披露会 集合写真

◆ 「地域に活力を与える女性たち」テーマにセミナー開催

11 月 11 日、本学社会連携センターとダイバーシティ推進室の連携企画イベント「女性の地域参画の促進に向けたセミナー『地域に活力を与える女性たち』」を水戸駅南サテライトで開催しました。感染症対策を講じた会場に約 40 人の参加者が集まりました。

このセミナーは、女性のエンパワーメントを支援する本学の取り組みの一環として企画したもの。講師には、日本製の授乳服を販売しているモーハウスの代表で NPO 法人子連れスタイル推進協会代表理事の光畑由佳さん、株式会社月の井酒造店代表取締役の坂本敬子さん、茨城県女性活躍・県民協働課長の安達美和子さんの 3 人を迎えました。それぞれ、これまでの仕事と家庭の両立の実践や、新たな働き方や文化を創出するための独自の取り組みを紹介し、参加者は興味深く話に耳を傾けていました。クロストークの進行を務めた本学ダイバーシティ推進室の木村美智子室長は、「問題を解決していく力は、3 人ともに行動力と柔軟性が共通している」と述べました。

セミナー終了後のアンケートでは、参加者から「大変な苦労もあったと思うが 3 人とも輝いている。自分も頑張ろうと思った」などの感想が寄せられ、本セミナーが女性の地域参画やこれからの働き方について考えるきっかけになったことがうかがえました。

左から光畑氏、坂本氏、安達氏

会場の様子

◆　オンライン授業の経験と知見から教育改革を展望するシンポ

11 月 13 日、国立大学協会との共催により、「大学教育シンポジウム―オンライン授業の経験と知見を教育改革に活かすために」をオンラインで開催しました。本学におけるオンライン授業に関する調査結果などを踏まえた今後の展望を示す機会として企画し、大学関係者や高等学校関係者など約 70 人が参加しました。

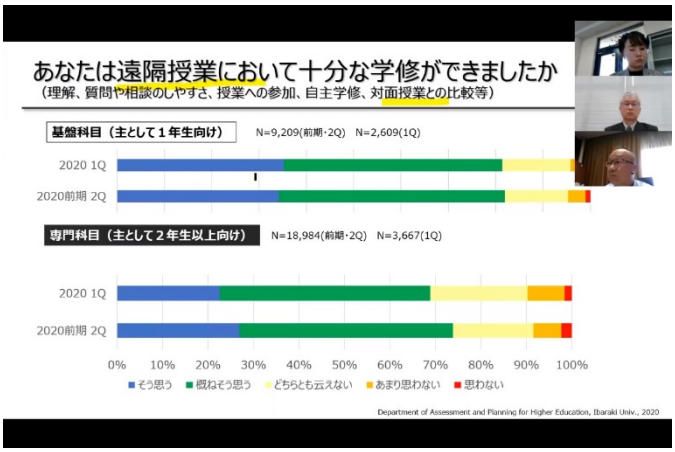
基調講演は、山形大学企画部の浅野茂教授と本学全学教育機構の嶌田敏行准教授が務めました。「コロナ禍の経験を教学マネジメント改革にどう活かすか」と題した浅野氏の講演では、山形大学においてオンライン主体の一定の教育効果を収めていることを示唆する調査結果を紹介。浅野氏は、「ICT を十分活用すれば、学生の振り返りや反復学習などを可能にし、教育効果を高めることが期待できる」と述べました。

また、嶌田准教授も、茨城大学の授業調査の結果を紹介し、昨年度より理解度・満足度が高くなり、授業外の学習時間が伸びていることを報告しました。また、今後、「録画やスライドといった授業のデジタルコンテンツを学生の予習の素材として利用することで、“知識やスキルの伝授”という従来のスタイルから、“学んだ知識やスキルをどう活用するか”といった点に焦点をあてたより高度な授業も展開しやすくなる」と指摘しました。

その後、高等学校教員や教育行政に関わった経験をもつ本学の柴原宏一特命教授と、本学卒業生でもあるリクルート北関東マーケティングの新妻幹生氏がそれぞれの経験を踏まえて報告を行いました。

後半のパネルディスカッションでは、県内の茨城キリスト教大学、茨城工業高等専門学校、常磐大学の各高等教育機関からも、それぞれのオンライン授業の取り組みや調査の結果が紹介されました。モデレーターを務めた本学の久留主泰朗理事・副学長は、「地域の教育機関の連携により、高等教育の水準の議論を加速させ、より柔軟な単位互換などの仕組みへと発展させていく。オンライン授業がもたらした公開性は、その重要かつ必要な要素になったと認識している」と締めくくりました。

基調講演を務めた山形大学の
浅野茂教授



オンライン授業に関する授業調査の結果が
各高等教育機関から紹介された

◆　農学部・コマツ共同研究で生産した米を県内団体に寄贈

農学部とコマツは、農業用ブルドーザーを用いた水稲栽培の共同研究で生産した米を、茨城県内で食料支援の活動をしている団体に寄贈しました。

この共同研究は、コマツの農業用ブルドーザーを用いて、水稲の乾田直播栽培の有効性を検証するもので、今年度からスタートしました。10 月に米（コシヒカリ）を収穫し、その活用方法を本学とコマツとで検討した結果、子ども食堂サポートセンターいばらきへ 990 キログラム、協同組合ネットいばらきへ 690 キログラムをそれぞれ寄贈することとなりました。子ども食堂サポートセンターいばらきは、茨城県内で子ども食堂を運営している団体のネットワーク組織で、今回寄贈された米は同ネットワークを通じて 7 つの団体に配付されるといいます。また、協同組合ネットいばらきは、茨城県内の JA や生協といった協同組合の連携組織で、コロナ禍において茨城大学を含む県内の学生への食料品の支援を実施しています。

11 月 16 日に実施した贈呈式では、寄贈を受けた各団体から活動の状況が紹介され、「新米をいただける機会はあまりない。新米を新米のうちに提供したい」などと謝意が述べられました。共同研究を担当している農学部の黒田久雄教授は、「最先端の農業技術を使ったお米。ぜひみなさんで味わってほしい」と語りました。

◆　研究開発職の働き方を学ぶ学生対象の企業訪問ツアー

11 月 25 日、学生向けの企業・研究所訪問ツアーとして、不二製油株式会社つくば研究開発センター（つくばみらい市）の訪問見学ツアーを開催し、農学部などから 13 人の学生が参加しました。

このツアーは、本学ダイバーシティ推進室が企画したもの。今年度は、同社の他、日立市の日立グローバルライフソリューションズ株式会社への訪問が予定されています。不二製油株式会社への訪問ツアーは、農学部の中村彰宏教授がクロスアポイントメント制度によって同社の執行役員・未来創造研究所長も務めていることから、今回初めて企画されました。

ツアーでは、施設見学とともに、つくば研究開発センターの津村和伸センター長、中村教授、及び同社開発部門分析開発室の芦田祐子さんがプレゼンテーションを行いました。このうち芦田さんは、自身が研究開発部門として初めて育児休暇を取得し、女性が働きやすい環境を切り拓いてきた経験などを紹介。さらに、同社の女性比率や育休取得率、ライフイベントとの両立を支える制度について説明しました。

質疑応答では、「大学時代の専門分野を活かせるか」「残業は多いか」「コロナ禍での勤務状況は」等の質問が学生から示され、活発な意見交換となりました。

不二製油株式会社
つくば研究開発センター

施設見学では中村教授（右）も
ガイド役を務めた

◆　水戸市男女平等参画社会づくり功労賞を受賞

このたび本学は、水戸市より「男女平等参画社会づくり功労賞」の表彰を受けました。

水戸市では、男女平等参画社会をつくるために積極的な取り組みをしている個人や団体、事業所を表彰する「男女平等参画社会づくり功労賞」を設けています。今年度が 15 回目の表彰で、個人の部、団体の部、事業所の部があり、本学は「事業所の部」の受賞となりました。

本学では、女性の活躍を推進しワークライフバランスを支援するためダイバーシティ推進室を設置し、女性教員及び女性管理職の増加に向けて「国立大学法人茨城大学行動計画」の作成や女性研究者を支援する 3 つの支援制度の設置、水戸市男女平等参画課と共催で実施したキャリアセミナーや公開講座の開催などを行っています。そうした取り組みが評価され、今回の受賞に至りました。

11 月 27 日（金）に水戸市役所で行われた表彰式には、久留主泰朗理事・副学長と木村美智子ダイバーシティ推進室長が出席し、高橋靖水戸市長から久留主副学長へ、表彰状及び副賞の盾が授与されました。

高橋市長より表彰を
受ける久留主副学長

懇談会の様子

高橋市長（中央）と
久留主副学長（右から 2 人目）